

こんなにも悲しくて、こんなにも激しい憤りを感じる講演は初めてでした。8月26日に行われた福島県飯館村の酪農家、長谷川健一さんの講演のことです。原発事故当事者としての語られた言葉には、牛飼いととしての愛情があふれていました。また、私が知らなかった事実がたくさんありました。

「戻るとは思わなかった息子」が『オヤジ、おれ、ベコやる』。そういつて声をかけてきた。そのうちに嫁さんが来る。孫が生まれる。うれしかったなあ。何をやるかという話になつて、仔牛用の牛舎をつくることになった。長谷川さんは原発事故が起きる前の幸せから牛の話を始めました。そして福島第一原発事故が起きました。穴を掘って、搾乳した牛乳をそこに流し込む日が続きます。飯館村の放射能汚染がひどくて人間が避難することになった時、「人間は避難しろ。牛は移動しちやだめ」と

悲しみいっぱい、怒りいっぱい 飯館村の酪農家・長谷川健一さんの原発講演会



「戻るとは思わなかった息子」が『オヤジ、おれ、ベコやる』。そういつて声をかけてきた。そのうちに嫁さんが来る。孫が生まれる。うれしかったなあ。何をやるかという話になつて、仔牛用の牛舎をつくることになった。長谷川さんは原発事故が起きる前の幸せから牛の話を始めました。そして福島第一原発事故が起きました。穴を掘って、搾乳した牛乳をそこに流し込む日が続きます。飯館村の放射能汚染がひどくて人間が避難することになった時、「人間は避難しろ。牛は移動しちやだめ」と

開けるまで、その間、ずっと東京電力に賠償請求をしていこう」長谷川さんはそう語ったと言います。集まった人たちは、とくに奥さんたちはみんな泣いたそうです。長谷川さんはスライドを使って

講演をされました。そのスライドの中には切なくなるものが何枚もありました。中でも、牛を殺処分するために牛舎から牛を出し、家畜商の牛運搬専用のトラックに乗せる場面はつらかったです。映し出された映像の中に出てきた牛舎はわが家の牛舎そっくりでした。福島第一原発事故被爆の実態は新聞などで見聞きして

いました。大事な真実は国も県も村も隠し続けてきたことがよくわかりました。東電などが放射線被爆を少なく見せるために、あの手この手を使ってきたことは聞いていました。飯館村でも放射線量を測定する場所で鉄板をしいたり、特別丁寧な除染をするなどの事実があった。住民に大きな被害が出る数値なのに、その数値を明らかにしないようにと行政当局に働きかけられたというのもショックでした。長谷川さんは最後に、「かわいそうなのは子どもたちだ。子どもたちが大きくなったときに差別が起きないようにしてほしい。また、風化させないようにしてほしい」と訴えておられました。この訴えに



懐かしい種目登場

25日、吉川区の川谷運動会に招かれ、参加しました。高齢化が進み、地元参加者が少なくなる中で、これまでずっと続いてきた集落対抗の競技は出来なくなりました。替わりに登場したのは小豆拾い競争、縄ない競争（写真は山賀源市さん）など懐かしい種目です。1分30秒ほどの制限時間で最も長い縄をなしたのは、地元の曾根一志さん。縄の長

さは何と2メートルにもなりました。

日本共産党議員団が干ばつ調査

日本共産党議員団は28日、浦川原区法定寺で干ばつの実態を調査しました。これまで調査した牧区、板倉区、大島区と同じように田は白くなり、ひび割れていました。



議員団では、これらの調査をもとに委員会などで対策の強化を求めています。

産業建設グループ集約問題で意見書提出へ

「絵にかいた餅」なんかおかしい」と柿崎区地域協議会



が行くことになる。窓口から集約されたところへ行つて、また木田庁舎へ行つて、集約されたところへ戻つて、また元のグループのところに行く。二度手間になり、タイムロスがあるのではないか。

●柿崎の場合、産業建設グループには農林水産、商工観光などたくさんあって、市民のみなさんがたくさん相談に見える。その人たちが全くいなくなった場合、総務・地域振興グループが取り次ぐといつてもなかなか話が見えず、時間ばかりかかっていくことが目に見えている。確実に市民のみなさんの足が行政から遠のいていく。災害対応を前面に出し、集約して災害対応するというが、うまく機能するか疑問だ。集約先以外で災害が起きた場合、発生した区へグループを移動させるというが、そうなるかと一か所に集めておく必要性が全く感じられない。ケースバイケースで、災害状況に対応しながら対処療法でやっていく方がいいと思う。

柿崎区地域協議会が8月24日開かれました。市側から、総合事務所の在り方について説明があり、その後質疑が行われました。質疑の中では、「これは絵に描いた餅だ」「何かおかしい」など反発の声が相次ぎました。そして地域協議会として、今後、町内会長連絡協議会など意見交換しながら市に対して意見書を提出することを確認しました。

協議会の中で出された意見や質問は今後の他区地域協議会や議会の審議に大きな影響を与えそうです。主な意見を紹介します。

●警察の場合も集約されて機動力発揮されるということだったが発揮されていない。本場に区出身の職員がいなくなつたときに機動力が発揮されるか不安だ。

●職員が減らされて、いまでも手が回らない状態だ。職員は自宅と総合事務所の往復だ。自分の休みを使って自分の管内を歩く努力をしている人が一部にはいるかも知れないが、一部だ。職員同士の資質が向上し、組織全体の水準が高まって、サービスの質が向上するというが絵

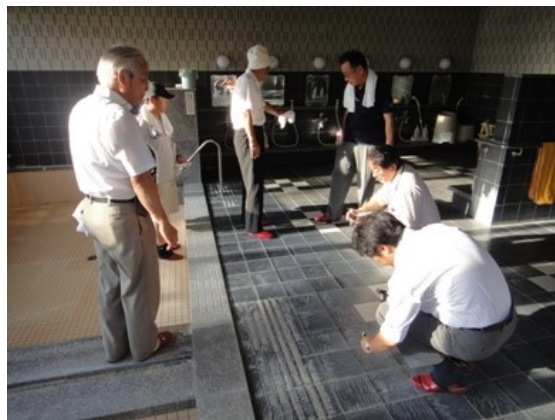
に描いた餅にならないか。それと、一業務を複数で担当して、複数区を対象に業務を執行すること、各区の市民と接する機会が増え、複数区に精通した職員の育成が可能というがこれも絵に描いた餅じゃないか。外に出て暇がないのに、何も無い時に外に出て、ここは危ないところだという確認をしているか。そこをはっきりさせないと、区民はたまらない。自宅と職場の往復という実態を改めていただかないと心配で不安で、こんな提案に賛成できない。

●なんかおかしい。「複雑多様化する市民ニーズへの円滑な対応」というが、これは定員削減ではなくて、職員を増やさないと対応できないのではないか。それを定員適正化計画と称して削減するという。これは言葉の綾というが大変な問題だ。平成32年度までに財源不足が71億円とあるが、こんなに深刻だったらいま計画している厚生産業会館やめればいい。(今回の方針では)「総合事務所の統廃合を想定するものではない」としてはいるが、これは本当か。信用できない。「市民への影響に可能な限り配慮」というのが、職員減れば影響するのは決まっている。この取組で具体的な効果が上がるというが、あれ本当に上がるのか。あな

た方の願望にしか見えない。議員有志であさひ荘の現状を視察

日本共産党議員団3人と他会派議員、合計6人で先日、あさひ荘の現状を視察してきました。

どこの場所へ行つても目に入ったのは、「上越市備品」という貼り紙です。厨房は、従業員が突然消えてしまった感じが残っていました。



床の一部にカビが生えていたり、タイルが浮き始めているところもありました。再開を急がないといけないと思いましたが、改めて思いました。

上越地域各消防署における空間放射線量測定結果(数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だということです)

	8月22日(水)	8月29日(水)
上越南消防署	0.040	0.030
上越北消防署	0.050	0.050
新井消防署	0.050	0.047
頸北消防署	0.043	0.036
頸南消防署	0.043	0.047
東頸消防署	0.040	0.053
高士分遣所	0.053	0.047
名立分遣所	0.050	0.043